

1. はじめに

私がカンボジアの稲作に関心をもったのは、日本で長期に亘るコメの減反政策の現実を知ったことからである。日本では、多くの農家がコメ作りだけで生活が成り立たず、主になる仕事を持たざるを得ないのが現状となっている。また、家族構成の変化により、作らなくなった田圃を事業農家に依頼せざるを得ない状況も多くなり、減反政策によってコメ作りを止めた土地では、転作作物が作られてはいるものの、水田で育まれた生物の営みが途絶え、様々な生態系に大きな影響を及ぼしている。

しかし、世界を見ると、多くの人々が飢えや貧困の渦中であり、コメの増産を急務とする多くの国が存在する現実がある。このような中でカンボジアの稲作に関心をもった。それまで、カンボジアと聞けば真っ先に地雷と虐殺、そして忌まわしいクメール・ルージュのイメージであった。そこで、実際に自分の目で見る必要性を感じ、平成24年3月（乾季）と9月（雨季）の2回、カンボジアを訪問して調査した。

2. カンボジアの稲作の歴史

図1と2に現地で購入した地図を示すが、カンボジアの国土の至る所に網目状の水路があることに気づいた。現地の人に尋ねると、これこそが、まさにあのポル・ポト水路だと聞かされた。そして、現在のカンボジアの稲作と、あのクメール・ルージュとの強い関わりを知った。



図1



図2

アンコール王朝時代（802年～1431年頃）、技術的にも高い緻密な設計、計画の下で、多くの寺院、僧院を中心（写真1,2）に、大規模な灌漑用水路や貯水池が数多く建設されている。その代表的なものとして今なお豊かな水を湛える、西バライ、東バライ（写真3,4）がある。卓越した水利計画の元、この頃は3期作、時には4期作も可能で、経済基盤は稲作中心の農業であった。アンコール朝の発展は、徹底した水の管理にあり、最盛期には領域を今のタイ、ラオス、ベトナムにまで拡大していた。この王都の周辺には約60万人の人々が住み、水利網と大貯水池の建設は雨季の排水と乾季の貯水を円滑に行う大装置でもあり、水利灌漑が整備された社会であった[1]。



写真1



写真2



写真3



写真4

3. カンボジアの農法の特徴と浮稲

カンボジアの平野部は8月半ばから10月末にかけて雨季となり、時には洪水にみまわれる。これを利用して二つの農法が実施されている。

第一として、籾の直まき農法である。これは、洪水状況になる9月、10月頃に稲の草丈が高くなる。また、それとは別に浮稲の場合(写真5)、穂先は常に水面より上に出ている。これは水位がゆっくり上昇し、荒れないことが条件であるが、浮稲はいつも晩生種である。浮稲は畦道で区切ることがなく、水を溜める必要がない。水深は3~4メートルだが見た感じは田圃である。その田を普通より早い4月末に耕し、籾をばらまきする。収穫は遅く、水が引くのを待つため時には3月になる。このようにして収穫量があまり期待できないのが浮稲の特徴である。

第二はプノンペン北部とシェムリアップ州において乾季に稲を栽培するというもので、特別な灌漑が必要となる(写真6)。シェムリアップもプノンペン北部も、浮稲作りには水位の上昇が速すぎるため、そこで考え出されたのが、ごく簡単な貯水池としてタムノップを造ることだった。タムノップでは、上流の取水路から増水路に水を受け入れ、水位が低下したときに溜めておいた水を運河に流し、水は揚水機で運河から汲み上げられ、1月から4月にかけて稲を育てる。他のところでは、水が引いたときに田植えをする。減水時に栽培し(11月~2月)、根が水を求めて伸長する。そして、乾季の水田は雨季になる前の6月に耕し、まき付けは早生稲に限られている[2]。



写真5



写真6

4. クメール・ルージュによるコメ増産政策とその実態

コメ増産政策に至った経緯として、私は次のように考える。1970年3月18日、当時の首相であったロン・ノルによってクーデターが起こった。もしこのクーデターがなかったら、クメール・ルージュ(ポル・ポト政権)は誕生しなかったのではないだろうか。

1970年以前のカンボジアは多くの問題を抱えるなか、どうにかして隣国のベトナム戦乱に巻き込まれることなく平和な状態を保っていた。人口の9割近くは地方に居住し、穏やかな日常生活を営んでいた。しかし、ロン・ノル将軍によるクーデターによってシアヌーク国家元首が解任されて状況が激変した。内戦が勃発し、ベトナム戦争のカンボジア領内への拡大によりカンボジア国土が戦場化となる。また、米軍の激しい爆撃を受け、多くの村が破壊された。拡大するベトナム戦争に巻き込まれまいとするシアヌークの努力にもかかわらず、カンボジアは巻き込まれていった。またベトナム軍が大量のコメを必要としたため、カンボジアで収穫されたコメの30~40パーセントまでもがベトナム、特に共産軍に密売され、密売によって政府は税金の徴収が出来なくなり収入は大幅に減少した。そのため、当時の首相であったロン・ノルは、政府が農民から強制的に安くコメを買い付けるキャンペーンをコメどころであるバタンバン州に展開するが、これに反発した農民が反乱を起こしたことで、バタンバン州を中心に不穏な事態が広がっていった。これに乗じて反ベトナムの気運が高まり、共産勢力(クメール・ルージュ)が農村部に影響力を浸透させていった。このような流れの中で、ポル・ポト率いるクメール・ルージュ政権出現が現実のものとなっていった。ベトナム戦争でのベトナム共産勢力の勝利も、クメー

ル・ルーチュ政権樹立に大きく関与しているのだろう[3]。

大混乱の中で「民主カンプチア」という新国家が誕生したわけだが、それはおそらくポル・ポト自身も含めて、政治的に未熟であったのではないだろうか。そのため、当時毛沢東思想から強い影響力を受けていたポル・ポトは、新国家の政策を「コメの大增産」でしか掲げることが出来なかった。そして、極端な集団化政策による共産化を押し進めるため、クメール・ルーチュの指導者は「革命組織（オンカー・パティヴァット）」を自称し人々を支配した。それは、従来の生活習慣、社会制度、行政組織、経済活動、都市生活、学校教育など一切を否定、また全ての宗教活動を禁止し多数の仏教寺院やモスクの破壊、僧侶やイスラム教徒であるチャム人を虐殺した。そして現地取材で聞いた話によると、一般の人びとの多くは過酷な労働条件の下で酷使され、多くの者が病気や栄養不良で死亡、この期間において多くの犠牲者や難民を生じさせることになった。こうして、カンボジア版「文化大革命」が断行された[1]。

具体的な経済政策である「コメの増産」実現のため、年一度の雨季栽培であった稲作を、乾季時にも栽培することによって、3期作を達成しようと、灌漑設備、貯水池設備の整備を図った。そして、「急げ・急げ」を合言葉に、無計画な下に建設されたポル・ポト水路は、その多くが使い物にならず、破壊され無残な残骸となって今でも国中に残っている[4]。しかし、その中でも成功例も多くあり、今でも豊かな水を貯え、地域周辺の地域の稲作に大きく貢献している。その代表的なものとして、バタンバン州にあるコンピンパイ貯水池がある(写真 7,8,9) [1]。



写真 7



写真 8



写真 9

5. 大虐殺の背景として

クメール・ルーチュの虐殺の背景として考えられるのは、コメの大增産を新国家の最大目標とし、稲作の近代化を人命より優先させ、灌漑施設建設に強制労働で駆り立て、意義を唱える反対勢力を粛清し、意にそまぬ国民を抹殺し、巨大農業帝国を構築しようとしたことである。それに加えて、子どもを含む多くの人々が病気や強制労働による過労、栄養失調による飢えによって亡くなっている。

クメール・ルーチュはカンボジアに一党独裁体制をしき、「コメ増産政策」を貫く中で、伝統的な晩生種である「浮稲」の栽培を徹底して禁じた。1970年代後半、カンボジアを支配したポル・ポトは、かつての栄光と繁栄の象徴であるアンコール王朝を強く意識し、民主カンプチアの王を夢み、そして掲げたコメ増産政策、政治思想においても多種多様な意見を恐れるあまり、違いを認めることが出来ず、歪んだ思想集団と化し、一方方向に突っ走り、そして滅びていった。

カンボジアが位置するインドシナ半島は、少なくとも数世紀にわたって多くの国家の利害と思惑が交差し激突し、そして抗争を繰り返され続ける場であった。それは隣国間との領土争いや、植民地となったこと、また東西冷戦抗争の代理戦争と言われるベトナム戦争に巻き込まれたことが大きいのではないだろうか。このようにして、この地を取り巻く複雑な国際関係は、しばしば戦争の舞台となり、人々の生命や暮らし、政治意識に常に大きな影を落としてきた。冷戦期にカンボジアをとりまいた複雑な国際関係を抜きにして、カンボジアのこの暗い現代史を語るなど出来ないであろう[4]。

このクメール・ルージュ時代に強制労働によって作られた、灌漑用水路の多くが使い物にならない無用の長物のまま残され、その後の内戦中には外部からの侵入阻止や、手っ取り早い威嚇方法として、大量の地雷が国中に埋められ、森林破壊などの環境へのダメージも大きく、今なお人々の生活環境にも大きな弊害をもたらしている。結局のところ、大国の利害関係に翻弄された小国は、陽の目を見ることなく押しつぶされ、底辺で細々と生きる弱い人たちが最大の犠牲者となっていく。この構造は今も変わらない。

6. おわりに

日本の農業の問題からカンボジアの稲作に興味を持ち、実際の姿を自分の目で確かめた。ここでは、そのまとめとして、カンボジアが今後も農業国として経済基盤を強めるために次のような提言を行いたい。(1) 修復可能なポル・ポト水路を修復し、乾季時の水資源を確保する。(2) 優良品種の開発、籾の品質向上・管理をし、売れるコメを作る。(3) 内戦により崩壊した村落共同体の信頼関係を回復し自給率を高め、そして、内戦時に失った教育者や専門家を育成し、農業を支える人材を育てる[5]。以上。

クメール・ルージュとは、特別な殺人狂集団が起こした異常な事件ではなく、これからも、いつでも、どこでも、起こりうることである。歴史から学ぶと言うことは、現在から新しい未来につなぐことであり、終わりのない対話であると考え。そして「百聞は一見にしかず」を痛感した。卒論というテーマの中で現場に立ち、そこで「見て・聞いて・感じた カンボジア」から、多くのことを学んだ。

参考文献

- [1] 綾部恒雄・石井米雄編「もっと知りたいカンボジア」、弘文堂、2000年
- [2] ジャン・デルヴェール「カンボジア」、白水社、文庫クセジュ、1996年
- [3] 山田寛「ポル・ポト革命史―虐殺と破壊の四年間」、講談社、2004年
- [4] 清野真己子「禁じられた稲―カンボジア現代史紀行」、連合出版、2001年
- [5] 鴨下顕彦「よみがえれ！科学者魂―研究はひらめきと寄り道だ」、丸善株式会社、2009年